

暗唱聖句 「それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです」 ローマ3：31

今週の聖句 創世記15：6、サムエル記下11、12章、ローマ3：20～23、31、  
ローマ4：1～17、ヨハネ第一3：4

今週の研究：パウロは救いの計画における三つの主な段階について述べています。

1) 神の約束（恵みの約束）、2) その約束に対する人の応答（信仰の応答）、3) 信じる者たちに神から与えられる義の宣告（義認）。アブラハムの場合のように、私たちの場合もそうです。

「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認めた」（創世記15：6）。これを信仰による義認についての、聖書の最も古い記述の一つと見ることができます。

月曜日：もし人が自分の力で救いを獲得しなければならない、あるいは義とされ、赦される前に一定の清めの標準に到達しなければならないとすれば、彼は必然的に内面に目を向け、自分自身と自分の行いを重視するようになります。そして、宗教はきわめて自己中心的なものとなります。

しかし、もし義認が神からの賜物であって、功績や価値と全く無関係であることを理解するなら、人はずっと容易に、また自然に、自己の代わりに神の愛と憐れみに心を向けるようになります。

神の愛と品性を反映するのはどちらでしょうか。自己中心の人でしょうか。それとも神中心の人でしょうか。

火曜日：パウロはここで（ローマ4：14～17）、律法を行うことによって神の約束を受けようとすることは信仰を無意味なものとする、と言ったのでした。これは強い言葉です。彼が強調しているのは、信仰は人を救うが、律法は人を罪に定めるということです。彼が教えようとしていることは、人が罪に定められるものによ

って救いを得ようとしても無益であるということです。なぜなら、ユダヤ人であれ異邦人であれ、私たちはみな、律法を犯した罪人です。したがって、私たちはみな、アブラハムと同じ者、すなわち信仰によって私たちに与えられるイエスの救いの義を必要としているのです。

木曜日：どこの国でも昔から、うそや殺人、盗みが今もなお罪深く、悪いこととされています。もし神の律法が廃止されたのなら、だれも罰されずに救われるのでしょうか。

もし律法が廃棄されたのなら、だれも死ぬこと無く救われるのでしょうか。そのようなことは聖書に書かれていません。（ヨハネ第一1：7～10、ヤコブ1：14、15）

新約聖書には、律法と福音の両方が現れます。律法は罪の本質を明らかにし、福音はその罪に対する解決法、すなわちイエスの死と復活を示しています。もし律法がなければ、罪もありません。とするなら、私たちは何から救われることになるのでしょうか。律法とその継続的な有効性という背景においてのみ、福音は意味を持ちます。

-----  
パウロはローマ4章で、ユダヤ人がよく知っているアブラハムの人生をたとえとして、信仰による義を説明しています。

アブラハムは創世記15章で、神さまから「子孫を天の星のように増やす」と約束されました。そして神さまはアブラハムとの契約のしるしとして、動物などを二つに裂いて並べました。神さまはその中を歩かれたのです。これはもしこの契約を破った時には、この動物のようになってしまったという重い約束でした。

国家同士の条約を結ぶ時などに用いられた方法とされています。

アブラハムには子どもがいませんでしたが、彼は神さまの約束を信じました。その彼を神さまは義と認めてくださったのです。

その後の聖書の記録を見ても、神さまの約束を信じて前進した人を、神さまは必ず守り祝福をしてくださいます。

同じように、わたしたちは神さまのお働きを始めようとする時に、必ず守ってくださると信頼して一歩を進めると、次々に不思議な方法で導いてくださいます。けれどもわたしたちが何もしなければ何も起こりません。

その神さまの力を信じて、今日まで歩んだからこそ、このような小さな教会で全国に教会だけでなく学校や病院、福祉、出版、食品などの事業を展開することができるようになりました。機関で働くようになり、わたしが属している福祉の働きを見ても、さまざまな専門分野での業務が次々に増えて行ったり制度が変わって行ったりしている現実を目の当たりにしながら、それでも事業が推進されていること自体に神さまの守りを感じます。

このように、日ごとの歩みにおいて、神さまの守りや導きなどを深く感じることができると、神さまをより深く信頼することができます。

神さまの約束に応答すると、祝福が与えられるという循環をくりかえすことにより、わたしたちと神さまの絆がますます太くなり、信仰が深められて行くのではないのでしょうか。